

# 深い河

## ——高齡者文学人生論

遠藤周作 (1923-1996)

『深い河』 (1993) 「講談社」

『「深い河」創作日記』 (1997) 「講談社」

参考：『深い河』 (1995) 監督：熊井啓

出演 大津 奥田瑛二 成瀬美津子 秋吉久美子

まことに彼は我々の病を負い、我々の悲しみを担った

遠藤周作は十二歳のときカトリック教会で受洗し、カトリック信者として七十三歳で死去した。死因は肺炎による呼吸不全。

三年前、腎臓手術を受けた直後の様子が「『深い河』創作日記」の末尾に「病状日記」として口述筆記されている。

「今まで五回にわたって手術を受けたが、今日の手術ほど痛く、辛く、たまらないものはなかった」 「途中でこのまま殺してほしいと何度も思った。痛み、激痛起り、唇も舌もカラカラに渴き、一秒でも早く手術が終わることを念じつつ、二時間半を堪えに堪えた」 「痛みをまぎらわすため、『深い河』の一節を思い出し、あそこはどう書くべきだったなどと考えるのも小説家の性であり、今のぞむのはあの小説の出来あがりだ。早く表紙をなでてみたい。この小説のために文字通り、骨身をけずり、今日の痛みをしのがねばならなかったのか」。

『深い河』が文学作品としてすぐれているかどうかは私にはわからないが、生涯のテーマを追究する遠藤周作が最後の力をふりしぼって執筆したライフワークのような作品ということにはわかる。

深い河とは、遊行期に入ったヒンドゥー教徒が乞食の姿で死ぬためにやってくるガンジス河だ。彼らは死後の生まれ変わりを信じている。



# 深い河

—— 高齢者文学人生論

その河のほとりへそれぞれの過去を背負う日本人のツアー客一行がやってきた。死後の生まれ変わりを信じて死んだ妻の面影を追う夫、誘惑して棄教させたことのあるカトリック神父をさがしもとめる女、人肉を食べた戦友の思い出をひきずる男、九官鳥が自分の身代わりに死んでくれたなどと考える大連生まれの童話作家など。

行き倒れになった老婆を背負うカトリック神父の大津はキリストに祈った。「あなたは背に十字架を背負い死の丘（ゴルゴタ）をのぼった。その真似を今やっています」。

火葬場におりる階段でつきとばされ、階段を転げ落ちた。血まみれになった丸い顔はピエロそっくりになった。担架に乗せられた時、大津は羊のような苦痛の声をあげた。「彼は醜く、威厳もない。みじめで。みすぼらしい。人は彼を蔑み、見すてた。忌み嫌われる者のように、彼は手で顔を覆って人に侮られる。まことに彼は我々の病を負い、我々の悲しみを担った」。

その大津の姿が病床の遠藤周作の姿と重なり、十字架のイエスの姿とも重なる。キリスト教が説いていることも、仏教が説いていることも、ヒンドゥー教が説いていることも、根底においては共通したものがあると思うという異端思想だが、彼はカトリック教会から破門されなかった。

父母のことのみ思ふ秋の暮 与謝蕪村